

第4章 和泉における古式土師器の様相

鈴木陽一（泉佐野市教育委員会）

1. はじめに

小阪遺跡では、F地区・G地区の土坑および溝から多量の古墳出現期の遺物が出土した。これらは、石器がわずかに含まれている以外は、すべて土師器（庄内式・布留式）である。これらの詳細については、第Ⅰ部第3章において記されており改めてふれることは避けるが、大半が溝または河川からの出土である。また、そのなかでも出土地点が溝と河川の合流点であったり、同一の溝が埋没した後再掘削されているものなどといったような状況から、良好な一括資料として、古式土師器の編年資料としてとりあげるには躊躇することを余儀なくされる。しかしながら、和泉北部地域の古墳時代前期における土器の様相を示すものとして、資料的価値は大きく位置づけられるものである。

古墳発生前後から古墳時代前期における新たな社会状況の急激な変化は、当然のことながら土器様式にも大きく反映されるところとなっている。これらは、いわゆる畿内第Ⅴ様式に後続するものとして「庄内式土器」¹⁾、さらにそれに続くものとしては「布留式土器」²⁾として注目され、数多く研究・論議されるところとなっている。今日では、「庄内式」・「布留式」ともに、その編年作業は極めて精度の高いところで分類されており、とくに、大和・河内地域においての編年的分類作業は、精緻を究めた感がある。

さて、和泉地域においても当該時期の土器の分類作業は精力的に進められており、近年では、堺市「四ツ池遺跡」³⁾および「船尾西遺跡」出土土器⁴⁾を基準とした樋口吉文氏による詳細な分類作業が試みられており、土器全体の変化についてはおおよその標識となり得るものと考えられる。このように、近年の発掘調査の増加による、新たな資料蓄積は確実に認められるものの、酒井龍一氏⁵⁾による業績以降、体系的な編年分類の研究は未だ不十分であると言わざるを得ない。とくに、庄内式土器の所属時期を弥生時代とするのか、古墳時代とするのか。また布留式土器を、須恵器出現後においても継続する土器型式として認めるのか否かの問題も、氏の研究以降論究されておらず、不十分な点が多く残されている。また、本報告書にも掲載されているように、近年頻繁に出土が報告されている「初期須恵器」は、布留式土器の下限問題を解決する上での重要な資料であると言える。このような中、本稿では現時点において、弥生時代終末期の土器と認識される北鳥池下層式（上田町第1層出土土器）から始まる→上田町第2層出土土器（庄内式）→小若江北式（布留式）といった土器型式の変化において、古墳出現期後の古相を呈する土師器という意味から、庄内式土器および布留式土器を含めて、「古式土師器」と呼ぶこととする。

なお、布留式土器の下限については、須恵器の出現によって、土師器の様式および構造上に大きな変質が見られる直前までの土器型式とする、安達厚三・木下正史⁶⁾、置田雅昭氏⁷⁾の論に同意するものである。

ここでは、和泉北部地域において良好な出土が報告されている、東雲遺跡⁸⁾、池上遺跡⁹⁾、豊中遺跡¹⁰⁾、府中遺跡¹¹⁾、の古式土師器をここに再掲して簡単な検討を行なうことで、小阪遺跡出土土器群の実体を明確にして、その編年的な位置づけを行っていく作業過程での一助となることを目標としたい。

2. 泉大津市東雲遺跡出土の土師器

泉大津市中央より、西端部、泉大津市東雲町に所在する遺跡である。調査では、古墳時代前期の溝、土坑、住居址等が多く検出されている。この中でも溝1および2からは、まとめて古式土師器が多量に出土しており、当遺跡の時期を知る上では重要なものとなっている。以下、溝1・2出土の遺物を簡単に紹介しておきたい。

溝1出土土師器

壺

1. 球形の体部と大きく開く口縁部を持つ、小型丸底壺である。体部に比して口縁部はかなり発達しており、大きく凌いでいる。器面調整は丁寧なへら磨きを施している。
3. 1同様のものであるが、1に比して口縁部の発達は少ない。剝離が激しく、器面の調整は内外面共不明である。

鉢

2. 球形の体部に、短く外反する口縁部を持つものである。底部は欠損しており不明である。

甕

4. やや肩の張った球形の体部に、「く」の字状に外反する口縁部を持つ。調整等は不明瞭であるが、色調は赤褐色を呈し、在地産であることがわかる。
5. やや短く上方に外反する口縁部を呈するもので、器壁等はかなり厚い。

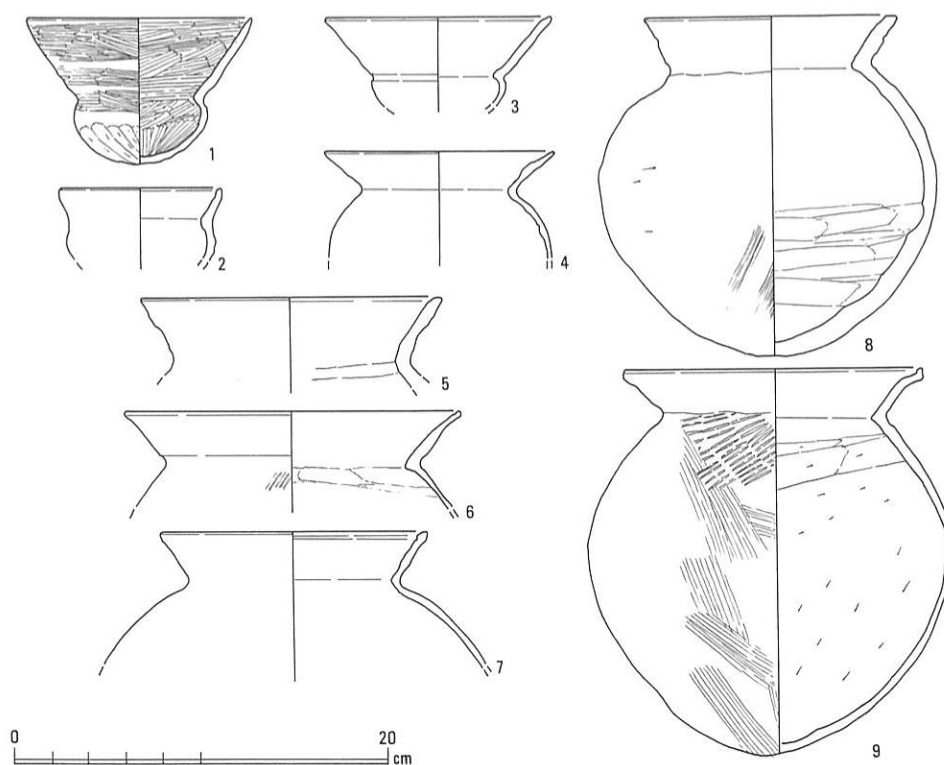


Fig.476 東雲遺跡 溝1出土土師器

6. 体部の内面を横方向の細かなヘラ削りによって、非常に薄手に仕上げたものである。口縁部は、屈曲が強く「く」の字状に外反し、端部はやや上方につまみ上げている。体部の外面には細かい叩き目がみられる。
7. 球形に延びてきたと思われる体部に、直線的に外反する口縁部を持つ。口縁端部は、内側にやや肥厚している。内外面の調整共不明瞭である。
8. 体部は球形丸底で、短く「く」の字に外反する口縁部を持つ。体部・口縁部ともに、器壁はかなり厚く、とくに体部の内面にはヘラ削りが施されているが、あまり薄くなっているではない。体部の外面にもヘラ削りの痕跡がみられるが、その後刷毛目を施している。在地産の模倣した土器と考えられる。
9. 球形の体部と丸底の底部に、「く」の字状に強く外反し、端部を上方につまみ上げる口縁部を持つ。体部の内面は、丁寧なヘラ削りによりかなり薄手に仕上げられている。体部には、細かい叩き目が施されるが、その上に底部から口縁部に向かって刷毛目が施される。色調は茶褐色である。

溝2出土土器

甕

1. 体部から「く」の字状に外反し、やや内弯しながら広がる口縁部を持つものである。口縁部の内外面はナデによる。
3. 球形に延びてきた体部に、直線的に広がりその端部を内側に肥厚させる口縁部を持つ。体部の内面は、ヘラ削りによって薄く仕上げられている。外面は、細かな横方向の刷毛目により調整を行っている。
11. やや厚手の球形丸底の体部にやや内弯しながら広がり、端部を内側に肥厚させた口縁部を持つ。体部の外面は、縦あるいは横方向に粗い刷毛目を施す。体部の内面には、指頭圧痕とヘラ削りが顕著にみられる。布留式甕の模倣である。
12. やや胴長の球形丸底の体部に、内弯しながら内側を肥厚させた口縁部を持つ。体部内面には、ヘラ削りが顕著に施され、かなり薄手に仕上げている。外面には、縦あるいは横の方向に細かな刷毛目が施されている。口頸部と体部の境には、指頭圧痕がみられる。

壺

2. 直立して短く真直ぐに延びる口縁部を持つものである。口縁端部は、やや内側に肥厚させ、方形状に治めている。器面調整は、ナデによって仕上げている。
4. 外反しながら延びてきた口頸部に、直線的に上方に延び、端部をやや内側に肥厚させた口縁部を持つ二重口縁壺である。内外面の調整はかなり磨滅しており、不明瞭である。
5. 体部から強く屈曲し、やや内弯しながら短く広がる口縁部を持つ。端部の内側への肥厚はみられない。
6. 球形の体部に大きく開く口縁部を持つ小型丸底壺である。口縁部と体部の比率はほぼ同一である。口縁部の内外面には、横方向に丁寧なヘラ磨きが施され、体部の内面には縦方向のヘラ磨きがみられる。
7. 4と同様の形状を呈する二重口縁壺である。体部の外面には、横方向の刷毛目が、内面にはナデまたは指頭圧痕が顕著にみられる。

2. 泉大津市東雲遺跡出土の土師器

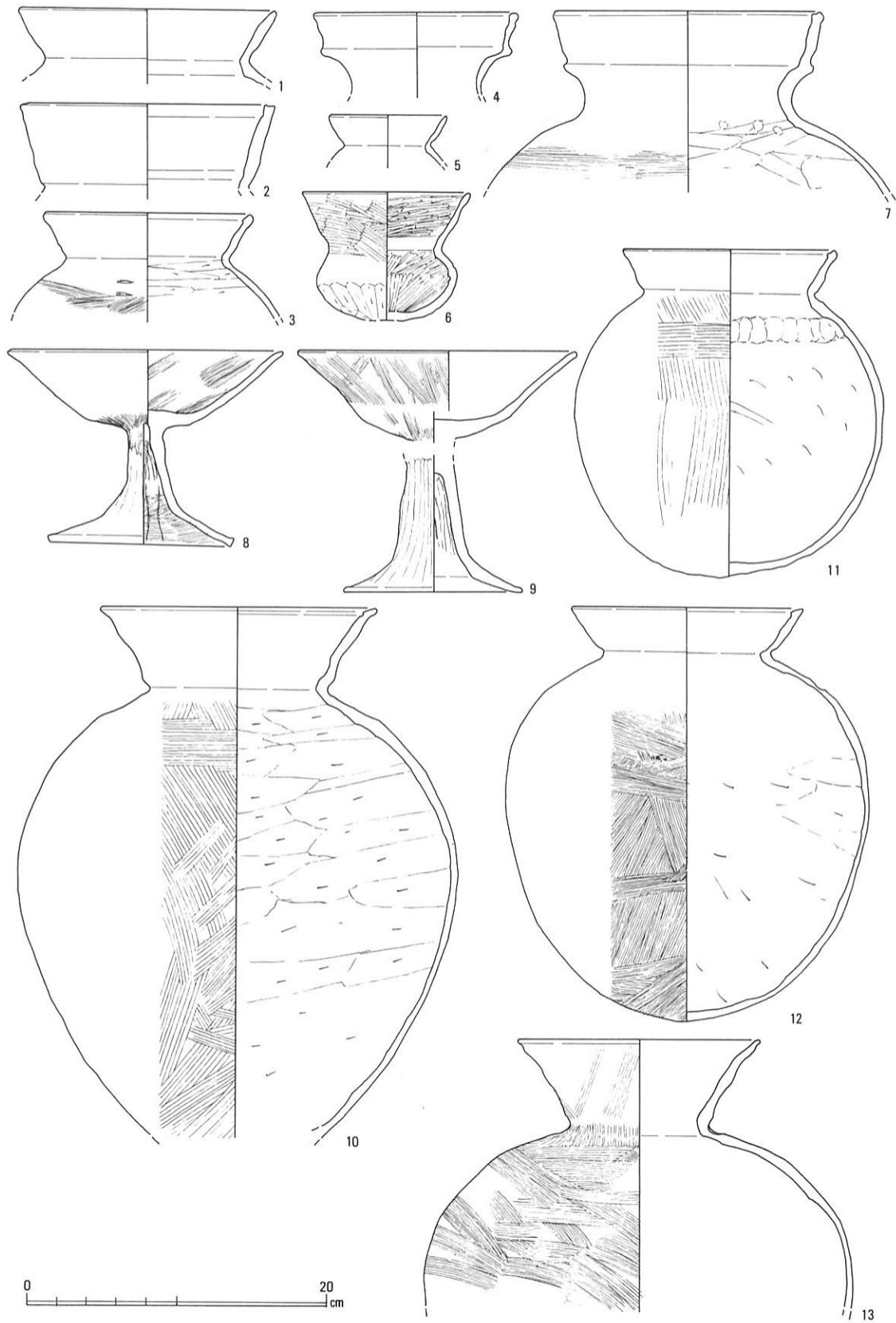


Fig.477 東雲遺跡 溝-2 出土土師器

10. やや胴長球形の体部に、直立して真直ぐに広がる口縁部を持つものである。体部外面には斜めあるいは横方向に粗い刷毛目を、また内面には横方向にヘラ削りが施され、薄い仕上げとなっている。口縁端部はやや内側に肥厚させている。
13. 10同様の直口壺であるが、口縁端部は内側への肥厚は認められない。体部および口縁部の外面には細かな横あるいは縦の方向に刷毛目が観察される。内面の調整は確認できない。

高坏

8. 坏部は屈曲して開くものの、屈曲部の稜線はなくなり、丸みを帯びた形状を呈する。脚部は比較的高く、裾はなだらかに広がっていく。坏部の内外面には縦方向の刷毛目が、裾部の内面にも横方向に刷毛目がみられる。脚柱部の外面には、縦方向のヘラ磨きがみられる。
9. 8よりもさらに坏部の屈曲部の稜線が不明瞭となっている。脚部の裾径はあまり開かず、大きくはならない。脚部の外面には縦方向にヘラ磨きがみられるが、坏部の器面には縦方向の刷毛目による調整が行われている。

3. 泉大津市池上遺跡出土の土師器

池上遺跡は、和泉市および泉大津市の両市にまたがって広がる、和泉地方を代表する弥生時代の集落遺跡である。調査では、包含層内ではあるが完形品である甕をはじめ古式土師器がまとめて出土している。

以下、出土品のうちの主要なものについて紹介しておきたい。

甕

1. 肩部の張ったやや長手の体部に、「く」の字状に外反する口縁部がつくものである。逆円錐台部には、突出した底部がつき、外面には粗い叩き目、内面にはナデによる調整が施されている。
2. 肩部の張らない胴長の体部に、ゆるやかに外反する口縁部がつく。逆円錐台部には、平坦面を持つだけで突出しない底部を有するが、正立は不可能である。外面の調整は、同一原体による叩き目が施され、口縁部中途までは「叩き出し」による。また内面はナデ上げによる調整がみられる。
3. 1同様に肩部の張った体部に、「く」の字状に外反する端部をややつまみ上げた口縁部がつくものである。底部は欠損しているが、外面には粗い叩き目が、内面にはナデ上げがみられる。
4. 肩部の張った体部に、「く」の字状に外反する口縁部がつく。重心は、中心よりやや上である。逆円錐台部には、ほとんど突出しない輪台状の平底がつく。体部外面の叩き目は、逆円錐台部とその接合部以上においては、溝幅の違う原体の異なったもので施されている。内面はナデによる調整が施されている。
5. 肩部の強く張った球形の体部に「く」の字状に外反した口縁部がつく。逆円錐台部につく底部は、輪台状の突出したものである。外面の叩き目は、同一原体による粗く溝幅の広いものである。内面の調整は、逆円錐台部がナデ上げによるもので、接合部以上では横方向のナデである。
7. 重心が体部のほぼ中心にあるもので、口縁部がゆるやかに外反するものである。外面の叩き目は、全て同一の原体によるもので、口縁部中途までは「叩き出し」によっている。底部は欠損しており不明である。内面の調整は、ナデによるものと思われる。
8. 球形の体部に、「く」の字状に外反し短く上方につまみ上げた端部をもつ口縁部がつく。器高の

3. 泉大津市池上遺跡出土の土師器

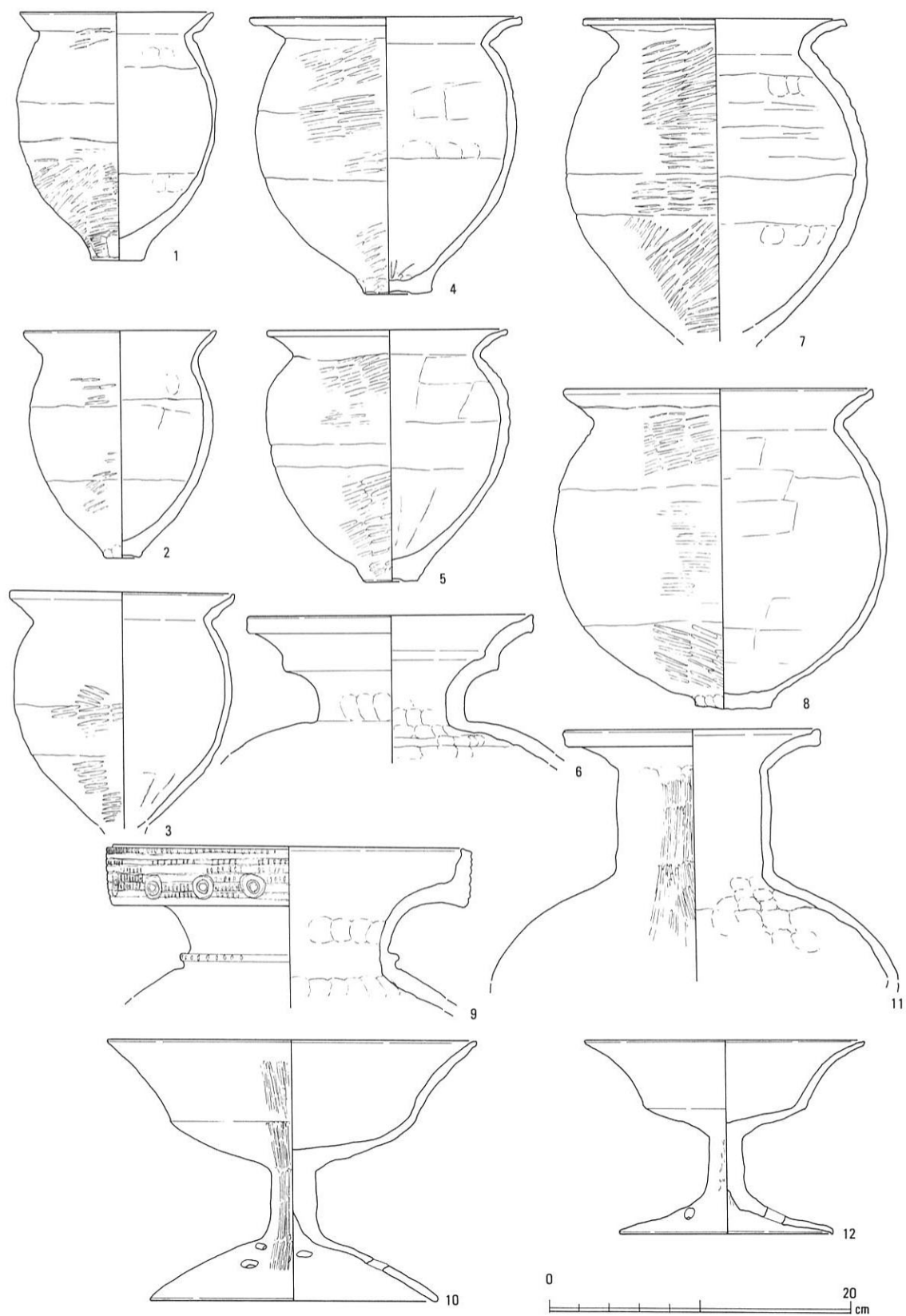


Fig. 478 池上遺跡出土土師器

ほぼ1/3も占めない逆円錐台部の底部は、短く突出した平底を呈するが、ほとんど正立不可能である。外面の叩き目は、逆円錐台部と接合部以上では溝幅の違った原体のものを使用しているが、口縁部中途までは、「叩き出し」状に施されている。内面は、前面横方向のナデがみられる。

壺

6. いわゆる二重口縁壺である。短くややゆるく外反する頸部から、再びゆるく外反し短く上方につまみ上げる端部を有する口縁部を持つ。調整は、不明な点が多いが頸部の内外面には、指頭圧痕がみられる。
9. 体部と頸部の境に刻み目突帯をめぐらせ、大きく外反する頸部に上方に短く延びる口縁部をつけて二重口縁壺に仕上げているものである。口縁部の外面には、竹管による7本の凹線文と、その間には刺突文が施され、口縁部の下半には円形浮文がみられる。
11. 丸く肩部の張った体部に長く直線的に延びる口頸部と、短く外反し、やや上方につまみ上げた端部を有した口縁部を持つ。口頸部の外面には、細かな縦方向のヘラ磨きがみられる。体部および頸部の内面には、顕著に指頭圧痕がみられる。おそらく、外来系の土器と考えられる。

高坏

10. 坏部の上半部がやや外反ぎみに広がって、下半部とはほぼその長さが等しいものである。中実の脚柱にゆるく内弯しながら外に広がる下半部をもつ。外面の調整は、縦方向に細かなヘラ磨きが施されているが、あまり丁寧ではない。
12. 直線的に延びた坏部下半と、大きく外反しながら延びる上半部は、10同様にその長さはほぼ等しいものである。中実の脚柱部には、屈曲が明瞭で直線的に広がる下半部を持つ。外面の調整は刷毛目がややみられるが、やはり丁寧ではない。

4. 豊中遺跡出土の土師器

豊中遺跡は、泉大津市の東南部にあたり、和泉市との市境に位置する。調査では、最終遺構面において竪穴住居址、ピット、大溝、小溝、落込み等の遺構が検出されている。このうち、大溝からは古式土師器が多量に出土しているが、上層および下層との明確な分類が詳しくはされておらず、その土器の扱いについては慎重な型式学的な分類が必要である。しかし、和泉地域における古式土師器の一つの様相を示すものであり、以下にその特徴を記していくこととする。

甕

1. 重心が中心部よりやや下半部で、ゆるく外反する口縁部を持つものである。器高の約1/3を占める逆円錐台部は底部が突出し、外面には逆円錐台部と接合部以上において原体の異なった叩き目が施されている。内面はナデによるものであるが、比較的平滑に仕上げられている。
2. 肩部の張った、重心を体部の上半部に持ち、「く」の字状に外反する口縁部を有するものである。逆円錐台部は、平坦面を持つだけで突出しない底部を持つ。外面叩き目の原体は同一のもので、前面にわたって丁寧に施されている。内面は全てナデによる。
3. 肩部の張った体部に、鋭く「く」の字状に外反した後、再び水平方向に外折する口縁部がつく。器高の1/3を占める逆円錐台部は、底部が突出し、外面には同一の原体の叩き目が施されている。内面前面にはナデが施されている。
6. やや下膨らみの体部に短く「く」の字に外反する口縁部を持つ。器高の2/5と比較的割合の多い

4. 豊中遺跡出土の土師器

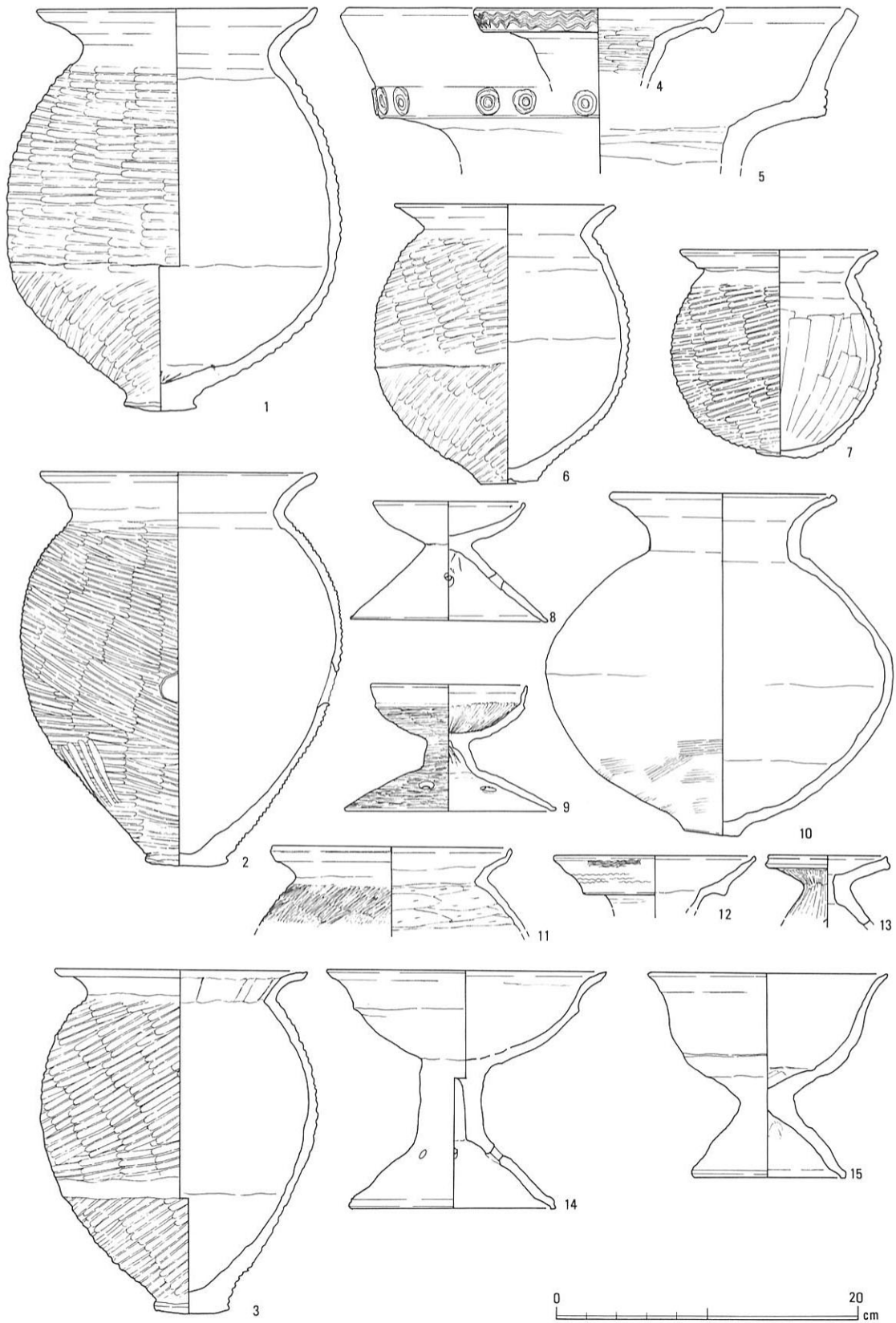


Fig.479 豊中遺跡出土土師器

逆円錐台部は輪台状の突出した上げ底となっている。逆円錐台部と接合部以上では、やや異なった叩き目の原体を持つものと思われる。内面の調整はナデによる。

7. 球形の体部に短く「く」の字状に外反する口縁部を持つ、小型のものである。逆円錐台部は、器高の約2/5を占めており、底部は円盤状の粘土を貼りつけただけのもので、正立は不可能である。外面の叩き目の原体は、同一のもので、内面の調整はナデ上げによるものである。
11. 外面には細かい叩き目と内面には丁寧なヘラ削りにより、非常に薄く仕上げた体部に、「く」の字状に鋭く外反する口縁部を持つ甕で、口縁端部はつまみ上げ状の肥厚が非常に顕著である。色調は茶褐色を呈し、胎土には角閃石が含まれている。今回出土した甕のうち約10%の割合を占める。

壺

4. 二段に屈曲しながら直線的に外反する口縁部を持ち、端部は貼りつけにより玉縁状におさめられている。端部の外面には櫛状の工具により波状文が施されている。内面は、丁寧な横方向のヘラ磨きが施されている。小型のものである。
5. 口縁部が二段に外反する、大型のいわゆる二重口縁壺である。外面には竹管の円形浮文を施す。外面にはヘラ磨きが、内面にはナデによって調整がなされている。
10. 球形の体部に、ゆるく短く外反しながら延びる口縁部をもつ、広口の壺である。底部は、突出した平坦な平底のもので、体部の外面には叩き目を施した後、丁寧なナデによって消している。
12. 口頸部の境に断面三角形の突帯を貼りつけることにより、外面からみて二重口縁状に仕上げている。外面には櫛描きによる波状文が施される。

器台

8. 端部をつまみ上げた碗状の受け部と、円錐状に直線的に広がる台部を持つ。器面全体の調整は、かなり磨滅しており不明瞭ではあるが、横方向の細かなヘラ磨きが施されているものと思われる。
13. 短く直線的に延びる漏斗状の受け部と、裾広がりの台部を持つ中空の小型器台である。器面の調整は、あまり丁寧ではない縦方向の細かなヘラ磨きが施される。

高坏

9. 碗状に延びてきた下半部と、上方に短く立ち上がる口縁部を持つ坏部に、短い脚柱部と裾部は、屈曲して平たく開く脚部がつく小型の高坏である。器面には横方向の細かなヘラ磨き調整を施し、坏部の内面には放射状の暗文を施している。
14. 弯曲した坏下半部と、短く外反する口縁部を持つものである。脚部は、比較的高く、柱部より屈曲して笠状に広がる裾部を持つ。内外面の調整は不明である。

鉢

15. 台付きの鉢で、碗状にゆるく外反しながら延びて口縁端部を短く外接する鉢部と、脚部は短くゆるやかに広がりながら裾部にいたるものである。内外面の調整は、共にナデによっている。

5. 府中遺跡出土の土師器

府中遺跡は、和泉市の府中町および伯太町にまたがって広がる、弥生時代中期から古墳時代にまで至る集落遺跡である。本調査では、主として古墳時代前期の竪穴住居址、溝、土坑、ピット等が検出されている。この中でも1号住居とされている竪穴住居址の床面からは、多量の古式土師器が出土している。

5. 府中遺跡出土の土師器

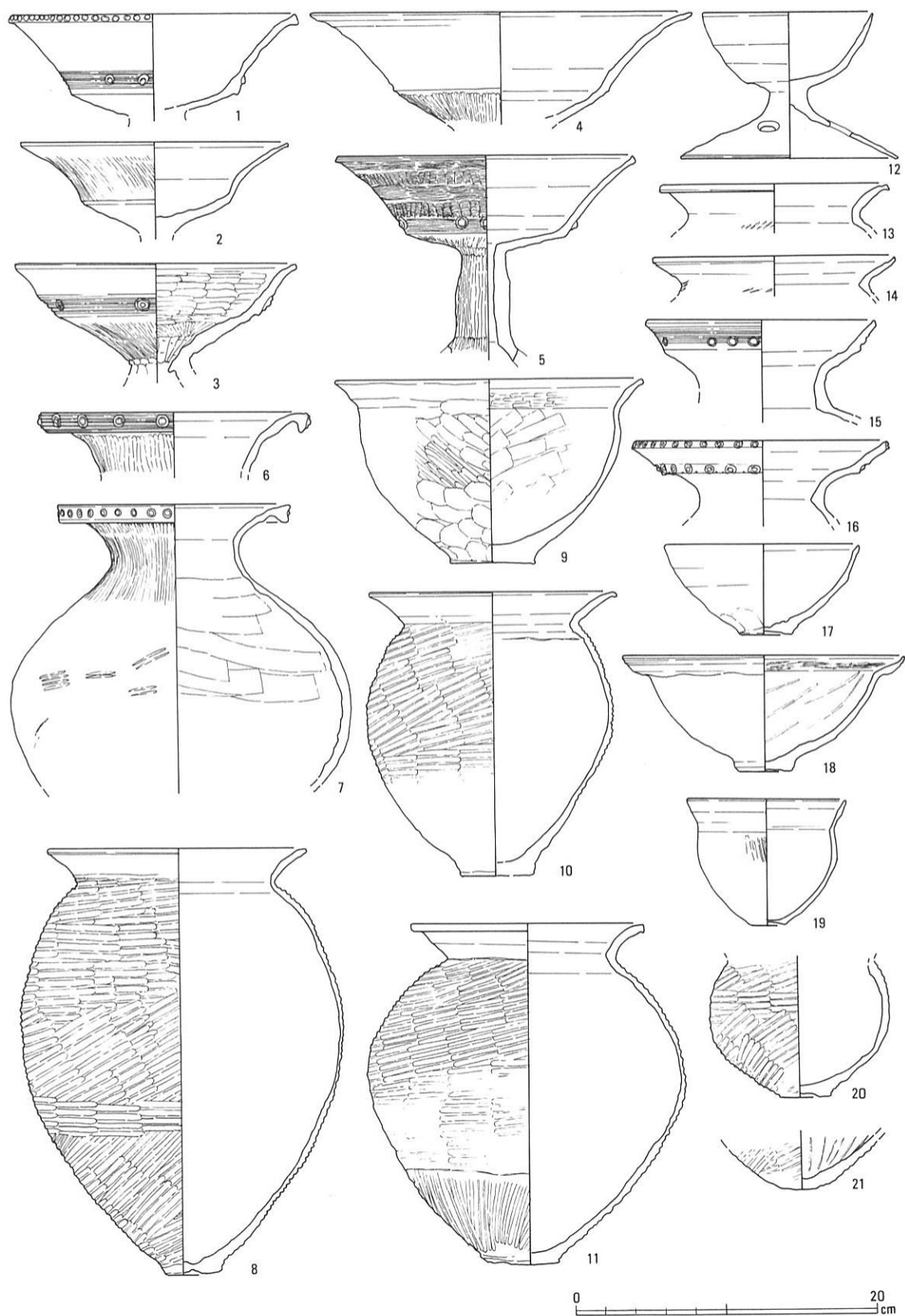


Fig.480 府中遺跡出土土師器

以下、主要なものを述べていく。

高坏

1. 坏部上半部はやや内湾ぎみに広がり、下半部の長さを凌ぐものとなっている。口縁部の端部および下半部と上半部の境には、円形浮文が、また浮文下には擬凹線文がみられる。
2. 形状は1とほぼ同様のものであるが、口縁部の端部は上方につまみ上げず、面を形成しない。また文様等は加飾されず、器面には縦方向のヘラ磨きが施される。
3. 脚部と坏部の接合部より直線的に延びる坏下半部と、短くゆるやかに外反する口縁部を持つ、中空の高坏である。坏部口縁の下半部には、擬凹線が施された後、円形浮文上竹管文が施されている。坏下半部の外面には、縦方向の細かなヘラ磨きが、また内面では上半部に横方向のヘラ磨きが、下半部にヘラ削りの後、縦方向のヘラ磨きがみられる。脚部の外面には、若干ではあるがヘラ削りの痕跡がみられる。
4. 形状は2同様のもので、坏下半部に比してその長さは、上半部がかなり凌ぐものである。
5. 坏部の形状はほぼ1同様のもので、長さで上半部がやや下半部を凌ぐものである。脚部は、脚柱部と裾部との屈曲は明瞭なものとなっている。1同様に加飾の状態も顕著である。
12. 碗状に弯曲した坏部と、短い脚柱部に屈曲して平たく開く裾部の脚部を持つ。調整は、内外面ともに剝離が激しく不明である。

壺

6. 外反しながら広がる口縁部のみであるが、その端部は大きく拡張し、端面に円形浮文を付け加飾している。口頸部の外面には縦方向にヘラ磨きが施される。
7. 球形の体部に6同様に大きく外反する口縁部がつくものである。口縁端部はやはり拡張させて、円形浮文で加飾が施される。口頸部外面には縦方向のヘラ磨きが、体部には叩き目がみられる。内面は横方向のナデによる。
15. ゆるく外反しながら延びた口頸部に、短く直線的に外反する口縁部を持つ二重口縁壺である。口縁部は円形浮文で加飾されている。
16. 「く」の字状に外反する口頸部に、強い稜をもって短く外反する口縁部を持つ二重口縁壺である。口縁部には二段にわたって円形浮文で加飾している。

甕

8. やや細長い卵型の体部に短く外反する口縁部を持つものである。器高の約1/3を占める逆円錐台部には、突出した輪高台の平底がつく。外面の叩き目は同一の原体を使用しているものと思われる。
10. 8同様にその重心が体部のほぼ中央にあるもので、口縁部は「く」の字状に外反し、やや端部を外折している。底部は突出した平底である。
11. 8、10同様に重心は体部の中央にあるものだが、その形状は球形状となっている。器高の約1/4程度の逆円錐台部は粘土盤を貼りつけただけの平底の底部を持つ。逆円錐台部と接合部以上では明らかに叩き目の原体は異なっている。
13. 口縁部のみであるが、前述した甕と同様の胎土を呈するが、わずかに残る叩き目がそれらに比して細かいことと、器壁をやや薄手に整形することを意識しており、庄内甕を模倣したものと考えられる。作りは粗い。
14. 口縁部は、直線的な「く」の字状に外反し、端部をやや上方につまみ上げられている。体部の内

6. 小阪遺跡出土土器の様相と占める位置

面はヘラ削りによって非常に薄く仕上げられている。外面には細かい叩き目が施され、茶褐色系統の色調を呈する。

20. 口縁部は欠損しているが、球形の体部と割合を多く占める逆円錐台部に輪台部の上げ底がつくものである。外面の叩き目は同一の原体によるものと考えられる。
21. 底部のみの出土であるが、底部は円盤状の粘土を貼った丸底のものである。外面の叩き目は、弥生第Ⅴ様式系統のものである。

鉢

9. 重心が下半部にある球形の体部に、短く外反する口縁部を持つ大型の鉢である。底部は突出した平底で、外面の調整にはヘラ磨きが施される。内面には、口縁部が横方向のヘラ磨き、体部には「ナデ上げ」による。
17. 逆円錐台形を呈し、上がりぎみの平底がつく直口の鉢である。器面はナデによる調整が施される。
18. 突出した平底と半球状の体部に、有段口縁がつくものである。口縁部の内面には若干のヘラ磨きがみられる。
19. 逆円錐台形の半球状の体部に短く「く」の字状に外反する口縁部がつく。底部は上がりぎみの平底である。器面にはヘラ磨きがみられる。

6. 小阪遺跡出土土器の様相と占める位置

以上述べてきた、各遺跡より出土した古式土師器の様相と、小阪遺跡出土土師器の様相を概観し、その前後・並行関係を究明していきたい。特にここでは、小阪遺跡で検出されたG地区の土坑40、溝30-a、溝32出土遺物、F地区溝24出土遺物をとりあげ、2・3の問題点を指摘し、その位置づけを行いたい。

なお、その編年の指標とする土器としては、一瀬和夫氏がその編年の基準として取り上げ、分類されている、高坏A型式¹²⁾をみていきたい。従来、古式土師器の編年の作業を行う基準といえ、その出土量の豊富なことと、全時期にわたって普遍的に見られることなどから、資料として甕が取り上げられ、それを軸として論究されることが一般とされてきた。こうしたことから、現在、大和・河内地域では「庄内甕」を標式としたかなりの精度を極めて分類されている。また、それらと共伴して出土する他器種の編年的な位置づけも、最近では詳細さをもって論じられてきている。このような中、和泉においては出土する甕の様相は、先に述べた両地域との様相とはかなり異質なものとして展開している。従って一瀬氏の述べるように、モードに敏感であり、その形態的特徴の受け入れやすさと在地生産性の高い高坏を、編年分類上の基準資料として取り上げ、さらにその変遷を分析し、他器種をそれに組み込んでいくことに基本的には同意するものであり、その変化は当地域においても十分に活用可能なものといえる。しかし即、氏の分類に、当地域の各資料が組み込まれるものではないことは当然であり、当地域でのより詳細な分類作業が進められてこそ、それらの詳細な分析が可能となってくる。従ってここでは、あくまで氏の分類を認識的なものとして取り上げ、編年する上での一つの標式としておきたい。

G地区土坑40出土土器

本土坑からは、下層より一括して甕、壺、高坏が出土している。これらの土器は全て在地産のもので、甕には弥生系の長胴粗製のものがみられる。これらの資料は、内容があまりにも乏しく、様相を確認で

きる器種が甕のみであり、その時期等を究明するには慎重にならざるを得ない。しかし、船尾西遺跡 S G-001¹³⁾出土の甕に同様の長胴粗製の甕が含まれており、唯一、本土坑出土土器解明への基準となり得るものである。

溝30-a 出土土器

溝30-a 出土土器は、その様相としては先に紹介した府中遺跡 1 号住居址出土遺物に比べ、新しい様相を呈し、豊中遺跡出土土師器より古相の状況を持っている。府中遺跡ではあまり散見することのできなかった、庄内系の有段高杯が豊富に出土していることや、直口壺および二重口縁壺などは全て無飾となっている。なお、甕の大半は相変わらず弥生第 V 様式系統の甕が主流を占めるものの、庄内式甕が甕全出土量の 2 割を数えており、府中遺跡などと比較しても、圧倒的にその出土量は多くみられる。また、庄内式甕を模倣したと思われる在地産の甕も多くみられるようになっている。

溝32出土土器

出土した土器はあまり多くなく、時期を判断する上では慎重にならざるを得ないが、1 点だけ出土している高杯 A 型式の破片を基準として検討するならば、庄内期の古段階に属するもので、先の溝30-a 出土土器より若干古相を呈するであろう。

溝24出土土器

溝24より出土した土師器は、先に紹介した東雲遺跡溝-1 出土の土師器より古相を呈し、豊中・古池遺跡河川状遺構¹⁴⁾より出土した一括土器に比べ新相を呈している。小阪遺跡溝24出土の甕は、庄内型甕および布留系の甕が弥生第 V 様式系甕と共伴して、甕全体の約 1/3 を占めている。これに対して、豊中・古池遺跡では、布留系甕および布留式甕がまったく出土していない。また東雲遺跡では、庄内式の甕もみられるものの、口縁部内面が肥厚する甕の出土することや、小型丸底壺に新しい形状を呈するものが現れている。

ただし、東雲遺跡出土土師器とはそのこと以外ではあまりその出土品の状況に大差はない。

以上のことから、記述した各遺跡出土の古式土師器をここでさらに比較し、並べてみると以下のようなことが考えられる。

古相順に並べるならば、次のようになる。

- | | |
|------------|-------------------------------|
| 1. 府中遺跡 | 第 1 号住居址出土土器 |
| 2. 小阪遺跡 | 溝32出土土器 |
| 3. 小阪遺跡 | 溝30-a 出土土器 |
| 4. 豊中遺跡 | 大溝出土土器 |
| 5. 豊中・古池遺跡 | 河川状遺構出土土器 |
| 6. 小阪遺跡 | 溝24出土土器 |
| 7. 東雲遺跡 | 溝-1 出土土器 |
| 8. 船尾西遺跡 | 井戸 S G-001 出土土器、小阪遺跡 土坑40出土土器 |

6. 小阪遺跡出土土器の様相と占める位置

さらにこれに池上遺跡出土の土師器と、東雲遺跡溝-2出土の土師器および上町遺跡¹⁵⁾井戸出土土器を加えて検討し、これらの出土土器を基礎として弥生時代後期末から古墳時代前期にかけての段階を大きくⅠ～Ⅲ段階に区分すると現段階では、次のようになるものと思われる。

1. 上町遺跡	井戸出土土器	(第Ⅰ段階-1 弥生時代後期末)
2. 府中遺跡	第1号住居址出土土器	(第Ⅰ段階-2 庄内期古段階)
3. 池上遺跡	出土土器	(第Ⅰ段階-2～第Ⅱ段階-1 庄内期中段階)
4. 小阪遺跡	溝32出土土器	(第Ⅱ段階-1)
5. 小阪遺跡	溝30-a出土土器	(第Ⅱ段階-2 庄内期新段階)
6. 豊中遺跡	大溝出土土器	(第Ⅱ段階-2)
7. 豊中・古池遺跡	河川状遺構出土土器	(第Ⅱ段階-2)
8. 小阪遺跡	溝24出土土器	(第Ⅱ段階-2)
9. 東雲遺跡	溝-1出土土器	(第Ⅱ段階-3 布留期古段階)
10. 東雲遺跡	溝-2出土土器	(第Ⅲ段階 布留期新段階)
11. 船尾西遺跡	井戸SG-001出土土器、小阪遺跡土坑40出土土器	(第Ⅳ段階 布留期新段階)

以上、小阪遺跡出土土師器が、和泉北部地域における古式土師器の編年上で占めている位置を究明するところに主眼をおき、検討してきたが、あくまでこれらは大筋の流れであり、弥生第Ⅴ様式→庄内式→布留式とみられる土器型式のなかで、具体的な編年を行えたものではない。さらに、上述したような出土状況および地点の様相が全く異なった各遺跡での出土資料を羅列していくことには、かなりの危険性が含まれている。しかし、大筋ではあるが和泉北部では、上述した変化をたどるものであることと思われる。今後、これらの各遺跡個々において改めて検討を加え、資料としては未だ少ない第Ⅰ・Ⅲ段階の資料の集積をまって、前後関係をより詳細な分類作業によって見通しを立てるとともに、弥生時代から古墳時代での庄内式甕や布留式甕の流入が和泉地域でも個々にばらつきが確認できる実態を加えて、本地域におけるより精度の高い、移行期の並行関係と地域受容の実態を把握する必要性がある。

註

- 1) 田中 琢 1965 「布留式以前」『考古学研究』第12巻2号
- 2) 末永雅雄・小林行雄・中村春樹 1938 「大和に於ける土師住居跡の新例」『考古学』第9巻10号
- 3) 樋口吉文・土山健史 1984 「四ッ池遺跡第83地区発掘調査報告書」『堺市文化財調査報告書』第16集 堺市教育委員会
- 4) 樋口吉文 1980 「船尾西遺跡発掘調査詳報」『堺市文化財調査報告書』堺市教育委員会
- 5) 酒井龍一編 1976 「和泉における『伝統的第Ⅴ様式』に関する覚え書き」『豊中・古池遺跡発掘調査概報』そのⅢ 豊中遺跡調査会
- 6) 木下正史・他 1980 「飛鳥・藤原宮発掘調査報告」Ⅲ『奈良国立文化財研究所学報』第37集
- 7) 置田雅昭 1975 「大和における古式土師器の実態」『古代文化』第26巻第2号
- 8) 坂口昌男 1976 『東雲遺跡発掘調査概要』泉大津市教育委員会
- 9) 坂口昌男・原島麻実 1990 「泉大津市埋蔵文化財発掘調査概報8」『泉大津市文化財調査報告』20 泉大津市教育委員会
- 10) 石上 怡・他 1978 『大園遺跡・古池遺跡発掘調査概要』大阪府教育委員会
- 11) 灰掛 薫 1978 『府中遺跡発掘調査概要・Ⅱ』和泉市教育委員会
- 12) 一瀬和夫 1988 「久宝寺・加美遺跡の古式土師器」『八尾市文化財紀要』3 八尾市教育委員会文化財室
- 13) 4)と同じ
- 14) 5)と同じ
- 15) 灰掛 薫 1975 『上町遺跡発掘調査概要』和泉市教育委員会